

2017年8月20日(日)朝10:10  
8月第3共同主日礼拝式説教

主の聖霊降臨節第12、自由交歓会等  
日本アライアンス庄原基督教会

## 説教題：7つの金の鉢；第7の金の鉢： バビロンの滅亡

聖書：ヨハネの黙示録 16章17～21節

<口語訳>

新約聖書402頁

ヨハネの黙示録 16章17～21節

<新共同訳>

新約聖書471頁

ヨハネの黙示録 16章17～21節

<新改訳第3版>

新約聖書494頁

ヨハネの黙示録16章17～21節

<塚本訳>

新約聖書811頁

主題：主イエス様から賜った聖霊の導き

によって主の弟子たちは、主の名による  
神の罪からの救いを宣べ伝えたように、  
私たちも、福音を伝えたい。

序論；

- ◇ヨハネの黙示録は、1章1節、「イエス・キリストの黙示」とありますように、神の御子イエス・キリスト様が、天使を通して(1)、長老・使徒ヨハネに与えた「神の国到来の奥義」の黙示で、ローマ皇帝ドミティアヌス(81～96)時代に記録されたものと理解されています。
- ◇ヨハネ黙示録1章は、御子の再臨信仰と愛、2章～3章は、7つの教会への手紙、4～5章は、羔羊礼拝と大讃美、6～13章は、聖徒の戦い、天使と龍(悪魔・サタン)、獣との戦い、14章は、小羊への大讃美、神無視の人々への裁きと信仰者への忍耐の求め、15章は、金の怒りの鉢による神の裁き序曲、16章1節は、金の鉢の用意命令、2節は、腫物、3節は、血海、4～7節は、血水、8～9節は、太陽炎焼、10～11節は、獣の座の暗黒による裁き、12～16節は、ハルマゲドンでの龍(悪魔・サタン)、第1、第2の獣と主なる神との最終決戦の預言です。
- ◇ヨハネの黙示録16章17～21節は、第7の金の鉢の注ぎ、バビロンの滅亡預言です。

本論；

◇本日、ヨハネ黙示録第16章17～21節から  
主の使信に思い・心をとめます。

◆黙示録16章17～21節；ヨハネは、第7の金の鉢の空中への注ぎとバビロン滅亡の施行  
を見ます。

◇16:17～21；塚本訳◆第七金の鉢—  
バビロンの滅亡

「17（最後に）第七の天使がその鉢を空中に  
注いだ。すると大きな声が（天の）聖所から、  
（神の）玉座から出て言うた——「（事は）  
成った」と。

18 すると（たちまち）電光と轟きと雷とがあり、  
また大地震が起こった。人間が地上に  
出来て以来かつて無い程のもの——  
そんな大きな地震であった。

19 大なる都は三つに分かたれ、諸国の町々  
も倒れた。大なるバビロンは（遂にその  
不義を）神の前に思い出され、神の怒りの  
憤怒酒（を飲むべく、そ）の酒杯が与えられ  
た。

20 (地震のために)島は悉く逃げ去り、山は見えなくなった。

21 また百斤ほどの大きな雹が天から人の上に降って来る。その雹の災厄が非常に大きいので、人々はその災厄の故に(また)神を洩した。」と、ヨハネは、空中への金の鉢注ぎとバビロン滅亡の龍(悪魔・サタン)軍団との最終決戦による神の裁きを見ました。

◇ 17～21節;「七の天使がその鉢を空中に注ぎ」、「大きな声が(天の)聖所から、(神の)玉座から出て言い」、「電光と轟きと雷とがあり、また大地震(以来かつて無い程の大きな地震)が起こって」、「大なる都は三つに分かたれ、諸国の町々も倒れた。大なるバビロンは(遂にその不義を)神の前に思い出され、神の怒りの憤怒酒(を飲むべく、その)酒杯が与えられ」、「(地震のために)島は悉く逃げ去り、山は見えなり」、「百斤ほどの大きな雹が天から人の上に降って来た」が、「人々はその災厄の故に(また)神を洩した」、との神の幻をヨハネは見ました。

◇17～18節；「七の天使がその鉢を空中に注ぎ」とともに、「大きな声が(天の)聖所から、(神の)玉座から出て言うた」と、記録されています。

⇒「空中」は、「空中の権」をもつ「龍(悪魔・サタン)」の権力を象徴している領域を示します(エペソ2:2)。

⇒併し、「空中への怒り注ぎ」と同時に、「(天の)聖所から、(神の)玉座から出た大きな声」は、「空中の真の支配者」が、「天の主なる神」であることの宣言の声でもありました。

◇19～21節；神の怒りが「電光と轟きと雷と大地震」、「大きな雹」の「災厄」と「バビロン崩壊」の出来事として表現されています。

⇒すべての「電光と轟きと雷」、「大地震」、「雹」が、「神の裁き」ではありませんが、天地万物を創造された神は、あらゆるものを総動員して、「神」を冒瀆する人々に「神の怒り」を示すことがおできになるのです。

⇒「虹」を見る時、「ノアへの神の救い」の約束を思い出すように、「空中の災厄」を通して、「神への信仰」へ悔い改めをするのです。

◆ I コリント13章1～13節塚本訳;パウロは、  
最後に残るものは、神の愛であることを示し  
ました。

◇ 13:1～3;塚本訳◆愛がないなら

「1 たといわたしが人間や天使の霊言を  
語っても、愛がないなら、響くゴング、騒々  
しいシンバルである。

2 またたといわたしが預言の賜物を持ち、あらゆる秘密とあらゆる知識とに通じていても、  
たといわたしがあらゆる信仰を持っていて  
山を動かすことができても、愛がないなら、  
わたしは無価値である。

3 またたといわたしの全財産をほどこしても、  
たとい焼かれるためにわたしの体をささげ  
ても、愛がないなら、わたしにはなんの益も  
ない。

◇ 13:4～7;塚本訳◆愛とは

4 愛はじっと辛抱する、愛は親切である。妬ま  
ない、愛は自慢しない、得意にならない。

5 無作法をしない、自分勝手にしない。激昂し  
ない、『(人の)悪いことを根にもたない』。

6 偽りを見て喜ばない、むしろ真理を喜ぶ。

7 すべてを我慢し、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐え忍ぶ。

◇ 13:8～13; 塚本訳 ◆ 愛は永遠にのこる

8 愛は決してすたらない。預言も無くなるであろう、霊言もやむであろう、知識も無くなるであろう。

9 なぜなら、わたし達がいま知っているのは部分的であり、預言しているのも部分的であって、

10 完全なものが来る(最後の)時には、部分的なものは(みな)無くなるからである。

11 わたしが幼児であった時は、幼児のように語り、幼児のように思い、幼児のように考えていたが、おとなになると、幼児の時のことを捨ててしまった(のと同じである)。

12 わたし達はいまは(何事も)鏡でおぼろに見ているが、(完全なものが来る)その時には、顔と顔と相對してみるのである。いまはわたしは部分的に知っているが、その時には、(今神に)知りつくされているからそのようにわたしも知りつくすであろう。

13 それゆえに、いつまでものこるものは信仰と希望と愛、この三つ。しかし、この中で一番大きいのは愛！」と、パウロは、神の愛が最後に残る一番大きなものと語っています。

- ◇ 1～3節；「人間や天使の霊言」、「預言の賜物を持ち」、「ゆる秘密とあらゆる知識とに通じ」、「山を動かすことができ信仰」があり、「全財産をほどこし」、「焼かれるために体をささげても」、「愛がないなら」、「無価値である」と神の愛の内実をパウロは見ました。
  - ◇ 4～7節；「愛」は、「じっと辛抱する、愛は親切である。妬まない、愛は自慢しない、得意にならない」、「無作法をしない、自分勝手にしない。激昂しない、『(人の)悪いことを根にもたない』」、「偽りを見て喜ばない、むしろ真理を喜ぶ」、「すべてを我慢し、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐え忍ぶ」と、「神の御子」の中にある「愛」をパウロは語っています。
- ⇒「神の愛」は、なぜ、最後に残される最も大事なものであるかをその内実からパウロは証しているのです。



◇8～13節；「預言も」、「霊言も」、「知識も無くなる」が、「愛は決してすたらない」と語り、「完全なものが来る(最後の)時には、部分的なものは(みな)無くなる」、「(完全なものが来る)その時には、顔と顔と相對してみる」、「いつまでものこるものは信仰と希望と愛」で、「この中で一番大きいのは愛！」と語り、「愛は決してすたらない」ばかりか、「いつまでものこるもの、信仰と希望と愛」の中でも、「神の愛が一番大きい！」と言うのです。

⇒KK師は、現代は、**神の福音を宣べ伝えることと、神の御子の再臨との中間地点**にあると語り、**福音の伝道・宣教は、神の御子の再臨の時には、終わるが、神礼拝は、神の御子の再臨の後も、終わることなく続くものであると、**語っておられます。

⇒「**(完全なものが来る)御子の再臨**」の「時」、「**神の国の愛の交わり**」の中で、「**愛の神**」を礼拝できることは、「**神礼拝**」を大事にして来た教会の最高の栄誉です。

⇒「**神なきバビロン**」は、**滅亡しますが、「愛の神」を礼拝する者は、必ず残されます。**

## 結論；

- ◇神は、変わらない愛と思いやりの神です。
- ◇ヨハネの黙示録は、1章1節、「イエス・キリストの黙示」で、神の御子イエス・キリスト様が、天使を通し(1)、長老・使徒ヨハネに与えた「神の国到来の奥義」の黙示で、ローマ皇帝ドミティアヌス(81～96)時代に記録と理解。
- ◇ヨハネ黙示録1章は、御子の再臨信仰と愛、2章～3章は、7つの教会への手紙、4～5章は、羔羊礼拝と大讃美、6～13章は、聖徒の戦い、天使と龍(悪魔・サタン)、獣との戦い、14章は、小羊への大讃美、神無視の人々への裁きと信仰者への忍耐の求め、15章は、金の怒りの鉢による神の裁き序曲、16章1節は、金の鉢の用意命令、2節は、腫物、3節は、血海、4～7節は、血水、8～9節は、太陽炎焼、10～11節は、獣の座の暗黒による裁き、12～16節は、ハルマゲドンでの龍(悪魔・サタン)、第1、第2の獣と主なる神との最終決戦の預言です。
- ◇ヨハネの黙示録16章17～21節は、第7の金の鉢の注ぎ、バビロンの滅亡預言です。

- ⇒ヨハネ黙示録16:17~21は、「龍(悪魔・サタン)」、「獣・支配者」、「獣・偽預言者」の国「バビロン」は、「滅亡」すると宣告します。
- ⇒「空中の権威」をもって、多くの人々を「神」を冒瀆する生き方へ誘惑して来た「龍(悪魔・サタン)」、「獣・支配者」、「獣・偽預言者」は、その特権を愛の神の前に放棄する日が必ず来ます。
- ⇒「(完全なものが来る)神の御子の再臨の時」、「神の愛は決してすたらない」と信じて、「愛の神」を信じ、礼拝して来た人々は、「最後に残されるもの」が、「信仰と希望」と共に、「神の愛」であることに気づき、益々、神を讚美する、神の国の礼拝生活を楽しめるのです。
- ⇒マルチン・ルターに始まった宗教改革は、信仰のみ(恵みのみ)、聖書のみ、すべてのキリスト者は神の祭司であり、すべての人に仕える神の僕であるとの最高の福音を手に入れましたが、「規範」という枠の中に人を封じ込める失敗もしました。
- ⇒KK師は、「福音の自由」の中に生かされる教会こそ、神の国の教会だとされます。